

“MY TOWN” うおっちんで

歩キ目デス & 足ラデス

Vol.43

『駕籠のある兵頭家長屋門』 四国最西端の庄屋建築

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

岡崎 直司

平成20年の2月早々、驚くべき情報
が飛び込み、わが耳を疑う。「えっ、あ
の長屋門が解体される!?」
その長屋門とは、佐田岬半島の三崎、
言わば四国の最西端にある庄屋の長屋
門で、県下でも珍しいことに庄屋駕籠
がぶら下がっている門として有名なも
のだった。取るものも取り合えず、まず
は現地に。直行する道中では、最初に取
材をさせて頂いた昭和63年の頃を思い
出しながら、あれからもう20年も経っ
ているのかと感慨深い。現在、合併で伊
方町となっている三崎は、対岸の大方
県佐賀関や別府と連絡するフェリーの
発着港で、歴史のある港町。平地の少な
い半島部にあって、人家が密集してい
るその中へと小道を入ってゆくと、ほ

家紋入りの隅棟瓦（すみむねがわら）



庄屋駕籠



樫（けやき）材の門構え



長屋門の基礎石垣



長屋門前景

どなく三崎庄屋兵頭家長屋門の前に至
る。

地元の方のご紹介も得て、厚かまし
いことながら、ご子孫の方に解体前の
記録調査や一部保存のお願いをするこ
とに。幸いにも理解を示して頂き、以
下はその際の聞き取りやこれまでの分
かっている事柄についての記録。

まず、兵頭家は宇和島藩時代から続
く大庄屋で、三崎町誌によると又左衛
門為親が文化十一（1814）年からそ
の役を拝命している。時に伊達藩主が
お成りになり、参勤交代や近辺の獵場
で鹿狩りなどの際には宿泊もされた家
柄。「伊達の殿様お岬が怖い」と俗謡に
うたわれ、参勤の折には宇和島を出航
後三崎に上陸の際は、海の難所である
佐田岬を空船で回し、兵頭家に逗留の
後、瀬戸内側の二名津から再乗船し上
方（大坂方面）へ向かった。

そうした家格を物語るような間口
十四間の長屋門。正面入り口頭上には
家紋「三つ引き」が誇らしげに飾られ、
入って直ぐ内側の右上には庄屋駕籠が
ぶら下げられている。柱も梁も一枚板
と思われる扉も、いわゆる門構えの部
分は全て樫材で、大扉にも潜り戸にも
ステータスの乳鉾（ちようぼ）が取り付けられ、厳し
い。庄屋さんの駕籠、かなり傷んでい
るがこれは保存されることとなった。

エピソードとして、かつては黒塗りの殿様用かと思われる駕籠が残されていたとか。戦後のある時期、三崎へ旅行の村芝居一座がやって来て、乞われるままに貸したところ、そのまま戻らなかったという。

さて、今回の緊急調査で分かったことがある。歴史の生き証人、タイムカプセルとも言うべき「棟札」が屋根裏から発見されたのだ。実測調査に松山から急ぎ駆けつけて下さった建築士福岡将也氏と、それをサポートした町見郷土館の高嶋学芸員のファインプレーと言っている。通常は上棟式の際に必ず棟木に取り付け、家のイササカを願う神事だったりもするのだが、必ずどこでも見つかるとは限らない。長い年月の内には、増改築など、あるはずのものが散逸するのはよくある話。しかも今回は板図まで見つかった。

それによれば、棟札には「兵頭又左衛門為親代 文政三庚辰四月吉祥日」と墨書されていて、つまり前述の如く大庄屋拜命の後数年を経て、1820年に建築されたことが分かる。文化文政の江戸文化が花開いていた頃、この四国最西端では兵頭家の長屋門が槌音高く棟上げをしていたという次第。やがて8年後にはシーボルト事件が起き、4、50年もすれば幕末から明治へと時代は

印判「三崎源」の入った瓦



佐田岬みつけ隊による見学会



棟札 (むなふた)

裏



表



五重扉の新倉



屋敷内の青石の石畳

大きく変貌を遂げるが、まだこの頃は平和な太平の夢をむさぼることが出来た。以降、激動の明治、大正、昭和と生き抜き、ついに平成20年を見届けて歴史の幕を閉じることとなった。その刹那に見つかった棟札の意義はとても深い。しかもそこには「長屋梁行式間半桁行拾六間」と書かれていて、実際は十六間の間口があったことになり、その長さは現在県下に残る長屋門の中では屈指の規模だったことが分かる。

大工棟梁の名は三崎西組の源治、相棟梁が同東組の直左衛門、以下、脇棟梁が8名、木挽と左官に至っては、三名づつがいずれもキチンと実名で表記されている。木挽・左官の出身地は大佐田浦や喜木村など皆この半島の職人たちである。

今回は、多くの方々の善意が結ばれ、家紋入り棟瓦や印判の刻まれた瓦、建築実測図、あるいは主要な門扉など、最低限の資料保存と記録を残すことが出来た。地域から188年の由緒ある現物が消滅するのは惜しまれるが、まだこれは所有者を始めとする理解の中で救えた事例の一つ。多くは誰からも看取られることなく消え去る文化がある。これからも、地域に添い寝する人の増えることが待ち望まれる。